

優秀賞（神奈川県青少年育成アドバイザー連絡協議会会長賞）

夏休みの体験格差

横浜共立学園中学校 3年 ^{よこやま}横山 ^{なつき}菜月



私は今年の夏休み、部活動で学校に行った日はまず図書室に寄り、朝日新聞の天声人語を読むことにした。苦手な国語を少しでも克服するためだ。それを読むことに慣れてきたある日、衝撃的な記事を読んだ。8月1日の天声人語だった。夏休みを無くした方がいいという意見を知った。私はソフトボール部に所属している。夏休みは練習や試合で充実していたし、今年もこれから行く家族旅行にもわくわくしていた。だから夏休みが無くなるなんてとても考えられないと思った。

その記事には、体験格差について書かれていた。経済的な問題や家庭環境が理由で、旅行に行ったり、キャンプに行ったり、習い事をしたりと様々な事を体験できない子供がいる。夏休みの期間が長いことでそういう経験ができる子と、できない子の間の差が大きく広がる。それなら、夏休みの期間を短くするか、いっそ無くした方がいい。その記事を読んで夏休みは無くなって欲しくないが、一方でそのとおりだ、とも思った。私自身の今までの春休みや夏休み、冬休み等を思い出してみた。すると、だいたい毎回旅行に行ったり、海外のサマーキャンプに参加したりと色々な事を体験していた。何となく当たり前前、いつもの事と思ってしまっていた。でもそれができない人もいる事実気付いた。滅多にできないはずの体験を何度もできたことで、段々感謝の気持ちも無く当たり前と感じていく。それは怖いな、と思った。普段の生活にも言える。例えば、行きたい学校を受験して入学すること。皆ができる訳ではない。このことを忘れずに感謝しながら学校に通いたい。

部活動の先生や先輩も同じ様なことを言っていた。私達ソフトボール部は人工芝の広いグラウンドで、日々、顧問の先生の指導を受け活動している。私が入部する前は、長期間校庭整備中でテニスコートを他の部と共有して利用し、顧問の先生も頻繁には顔を出せなかったそう。先輩や先生は「今のこの環境は決して当たり前ではない。感謝しながら活動しよう。」と言っていた。このことを改めて実感した。

私は「部活動のために学校に通っている」と言っている程、ソフトボール部が大好きだ。夏休みには特に好きなノックがたくさん受けられる。チームの仲間と深く

まって、夏休みはチームも個人も大きく成長する。今年も「夏休みが永遠に続いたらいいのに」と何度も思った。

私の父は単身赴任をしている。父が長期休みには家族旅行を計画してくれる。そこで父と会えなかった時間を取り戻す位、遊んで食べておしゃべりをする。父との久々の再会はやはりとても嬉しい。私にとってこの家族旅行も夏休みの幸せな時間だ。

体験格差。体験できている子とできていない子の差は、今ははっきり目には見えない。でも私の経験からもその差は大きいと思う。だからこの問題を見過ぎてはいけない。私は今は楽しい経験をさせてもらっている立場だ。新聞の記事にはこの問題について、取り組んでいる団体があるとあった。また、困っている人がこの情報を知らない場合があると書かれていた。インターネットで調べてみると「子どもの体験格差解消プロジェクト」というものがあつた。体験機会を子供達に提供する団体だ。きっと夏休みの体験はかけがえのないものになる。このような情報が困っている人の所に届いて欲しい。このホームページには、その団体のスタッフのことを「一生の思い出を届ける人」と書かれていた。とてもカッコいいと思った。中学生の私が困っている人達を直接助けることは難しい。私に今できる事は自分の環境や機会に感謝する事、部活動を楽しみながらも頑張る事、勉強等大変な時もあるけどあきらめない事だと思う。今年も大好きな夏休みはもう終わってしまうが、夏休み明けの学校や生活はありがとうで始めよう。私と一緒に最高の体験を作ってくれる両親等大人達は、きっと昔は与えてもらっていたのだろう。だから私も大人になったら、「一生の思い出を届ける人」になりたい。まずは大学生になったら、体験ができない子供達と一緒に素敵な思い出を作るお手伝いがしたいと思う。